

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02821

研究課題名(和文) 経験学習の視点から集合研修の転移を目指す教師用アクションプランシートの開発

研究課題名(英文) The Development of the action Plan Sheet for the Teachers that Aims to Transition of Teacher Development to Educational Practice from the Point of View of the Experiential Learning

研究代表者

寺嶋 浩介 (Terashima, Kosuke)

大阪教育大学・連合教職実践研究科・准教授

研究者番号：30367932

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、教師が集合研修の成果を校内で転移させられるように、その実態を明らかにし、支援方を考えようとした。まず、研修転移モデルを構築し、具体事例を通してモデルにおける要因がどのように機能しているのかを検討した。インタビューをもとに仮モデルを作成し、それを検証するために、8名の教員に対する追加インタビューを実施した。その結果、作成した転移モデルは大枠で支持された。これらの結果をもとに、教員研修の転移プロセスモデルを提案した。そのモデルをもとに、具体事例を分析した。以上と同時並行し、研修転移を促すアクションプランシートを開発し、日本教育工学会において発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、教員研修プログラムそのものの開発ではなく、その後の教師の行動(研修転移)を支援するという視点から組み立てられた研究である。これまで、教師教育分野において、研修転移はその評価の難しさから研究対象とはされてこなかった傾向にあったが、本研究では、教師教育における新たな視点を提供した。

また、研修転移そのものを評価するのではなく、研修転移を充実させるためのツールを開発した。これまで、教師教育における研修転移の評価の難しさに課題があった。しかし、研修転移を支援するという視点からツールを開発する教育工学的アプローチによる研究とし、旧来から言われてきた問題を乗り越えようとした。

研究成果の概要(英文)：In this study, we attempted to clarify the actual situation and to consider supportive measures so that teachers can transfer the results of group training within the school.

First, we developed a training transfer model and examined how the factors in the model functioned through specific cases. A tentative model was created based on the interviews, and additional interviews with eight teachers were conducted to verify the model. As a result, the developed transition model was largely supported. Based on these results, we proposed a transfer process model for teacher training. Based on the model, specific cases were analyzed. In parallel with the above, we developed an action plan sheet to promote the transfer of training, and presented it at the Japan Society for Educational Technology.

研究分野：教育工学

キーワード：教員研修 集合研修 研修転移 教師教育 経験学習

1. 研究開始当初の背景

学校の教師が、自身の成長を図るために勉強する場として、校内で行われる研修と校外で行われる研修にわけられる。後者における代表的なものとして、教育センター等に赴き、他の学校の教師とともに研修を受ける場（以下、集合研修とする）がある。

集合研修は、その成果を実際に校内や自分の仕事に役立てることが期待され、そうできるように設計されているのが一般的である。研修の成果を実際に仕事の場で役立てることを人材育成研究においては、「研修転移」と言う（中原 2014）。

人材育成研究においてもそうだが、教師教育においても集合研修の成果を転移させることに課題がある。一般的には、教師が多忙すぎて行動に移せないといわれるが、本当にそれだけだろうか？ 実際に研修の転移を促す仕組みの研究から考えると、「学習者」「プログラム設計者および講師・運営者」「管理職・同僚」という要素があるという（鈴木 2015）。学術上、これらの要素が全て調整され、効果的な研修転移が進められることになる。すなわち、集合研修で学んだ教師のみが漫然と努力するレベルで研修転移を図ることはむずかしいことになる。教師が、集合研修で学んだことをもとに更に学び続け、仲間の手を借りながら、進めていくことが必要である。これまで応募者らの研究では、ただ「学ぶ」だけではなく、自分自身が「経験学習力（経験から学ぶ力）」を発揮し、今ある状況を仲間とともに「変えられる教師」の必要性について明確にしてきた（時任・寺嶋 2016）。そして、その必要性を実感できる教材を開発してきた（寺嶋・時任 2017）。しかし、研修で学んだことを現場で効果的に転移させるなどの具体的な場面を取り上げ、活用できるようなツールは存在しないことから、以下の問いを立てた。

問い

教師を対象とした集合研修で学んだ成果を校内で転移させるために、教師がどのような視点から、その後の校内研修における目標や活動を設計することが必要か？ そして、教師は自ら立てた目標に基づいて行動に移していく際にどのような態度で取り組むことが必要か？

2. 研究の目的

本研究を通して、教師の研修転移を促すことができるような、アクションプランシートの構成要素を明確にする。

3. 研究の方法

人材開発に関する研修転移の先行研究から、教師個人が研修後にどのように振る舞えば、成功に繋がっているかを明確にする。

集合研修を受講した教師を対象として、その後どのような行動を取り、どのような困難に直面したのかを聞き取ることで、教師の研修転移を成功させる秘訣を明らかにする。それに基づき、教員の集合研修の転移モデルを組み立てる。

組み立てたモデルに基づき、特定の教員研修をとりあげ、その詳細を分析する。

その情報を整理する際、経験学習の先行研究で取り上げられている構成要素（ストレッチ、リフレクション、エンジョイメント、思い、つながり）（松尾 2011）の視点も踏まえる。

上記したものにに基づき、研修転移を促すことのできるように、集合研修受講後の教師を対象としたアクションプランシートを開発する。

4. 研究成果

(1) 研修転移モデルの開発について

まず、8名の教員を対象に、これまでの教職経験を振り返ってもらい、本務に活かすことができた研修について、非構造化インタビューを実施した。その結果を踏まえ、研修の転移に関するモデルを作成した。その結果、図1のような研修転移モデルを暫定的に開発をした。

次に、モデルを検証するために、本研究では研修内容を実践に活用、もしくは校内全体に広げた経験のある教員に対する半構造化インタビューを行った。8名の教員に対し、以下のような内容を尋ねた。

1. 校種、担当教科、教員歴

2. これまで受けた研修の中で、その後、転移に繋がった研修はあるか

<以下、2で回答した研修について回答>

3. 研修の内容と転移の具体

4. 研修の受講をどのように決定したか

5. 研修の受講前に準備したこと

6. 研修内容を校内に活かすために、研修中やその後にやったことはあるか

7. 研修内容を自分で活用するときに、気をつけたことやそれに対して校内や管理職からのサポート等があったか

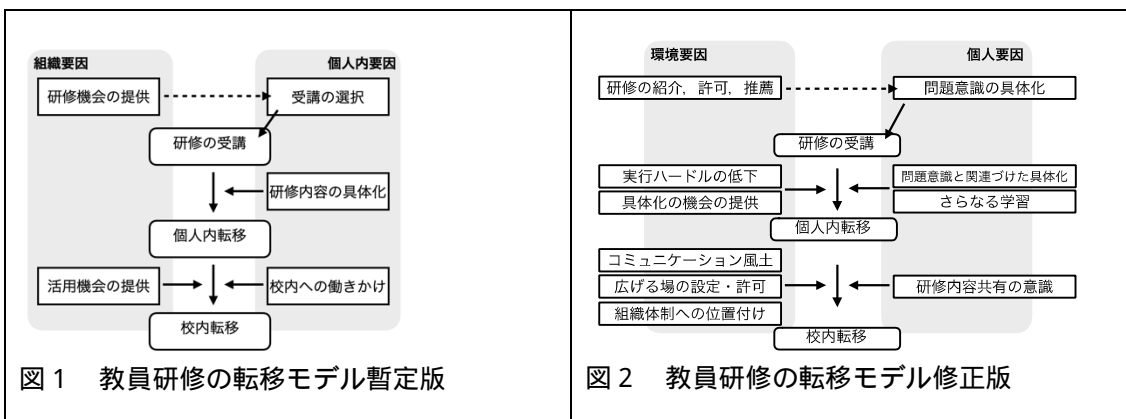
8. 研修内容を校内に広げるときに、気をつけたことやそれに対して校内や管理職からのサポー

ト等はありませんか。

<以下の項目は一般論として>

9. 研修の内容の転移に関して、どのような管理職の動きや校内の風土があれば、それらがやりやすい、もしくはやりにくいと思いますか。

その結果、図1のモデルについては概ね支持されたが、さらにインタビュー内容を踏まえ、図2へと修正をした。



(2) 集合研修の具体事例分析について

前述のモデルを念頭に置きながら、研修転移事例の詳細について、調査分析をした。

(a) 研修転移場面における環境要因の分析（英語科教員を対象として）

本研究で着目したのは、研修で学んだことを活かす場としての所属校において、転移に影響を与える環境要因である。本調査におけるリサーチクエスチョンを「研修での学びを所属校において転移をさせる際、転移が起きる要因と起きない要因は何か？」を設定し、現職教諭を対象とした調査を実施した。

具体的には、過去に集合研修等を受講した経験のある公立高校に勤める英語科教諭を対象に、「英語科教育の研修で学んだこと」が所属校において「生かされる/生かされない」要因について半構造化インタビューを実施した。本研究を進めるにあたり複数回の調査に応じることが可能なインフォーマントを選定・調査の依頼をし、本人及び学校長の承諾を得ることができたA県、B県、C県、D県の公立高校に勤める8名（A県3名、B県3名、C県1名、D県1名）を対象に第一回目のインタビュー調査を実施した。尚、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、対面でなくテレビ会議システムを使ったインタビューを実施した。

下記項目について質問を行い、適宜詳細について尋ねる質問を追加した。

1：これまでに受けてきた英語科教育の研修で、自分自身の教師生活に役立つと感じた内容とその要因

2：そこで受けた英語科教育に関する研修が、所属校において役立ったか否か

3：2：の結果が生じた要因

インタビューは録音し、逐次文字化したのちオープンコーディングと軸足コーディングを行った。

分析の途中経過として、以下の傾向が見られた。

(ア) インフォーマント達はこれまでに受けてきた英語科教育に係る研修（初任者研修や10年研修、文部科学省主催の集合研修等）から、4技能に関する様々な学びを得ており、それらを所属校において生かそうと考えていた。

(イ) しかしながら、研修で扱う4技能のバランスの取れた英語科教育に関する内容を実際に所属校で実践する際には「足並みをそろえる」という学校文化が障壁になっていた。

(ウ) また、個人の裁量で内容を変えることができる授業において研修で学んだことを活かす場合においても、自身がこれまでに培ってきた受験指導のノウハウをセイフティネットとし、模擬試験等の結果が下がらないよう調整をしながら授業に研修で学んだことを生かしている傾向にあることが明らかになった。

特に、(イ)(ウ)は大学進学率の上昇に力を入れる高校において顕著に意識されており、インフォーマント達は自身が考える良い英語科教育と実際の進学指導の間でジレンマを感じながら授業に取り組んでいる可能性が示唆された。

(b) ICT推進リーダー教師のICT活用の普及・推進に資する行動の分析 研修転移場面での経験

学習の視点から

本研究では、ICT 推進リーダー研修を受講した教員が、研修終了後に ICT 活用の普及・推進に関わる取り組みをどのように考えて行っているかを明確にしようとした。経験学習の観点から、対象者は「信念」に基づいて、「エンジョイメントとストレッチ」にあわせて、「技術」を適用することで行動をしているという仮モデルを組み立てた。仮モデルに基づき 5 名の教員に対してインタビューをした上で、発言をコード化し、仮モデルの下位カテゴリを記述した。その結果、表 1 のような発言に整理され、教員の行動の具体が明らかとなった。また、仮モデルを発展させ、図 3 のようにまとめた。

表 1 発言の分類

カテゴリ	サブカテゴリ	A	B	C	D	E
信念	研修で実感した使命感	○	○	○	○	
	公教育として課されている責任感	○	○	○	○	○
	経験を伝えたいという思い	○	○		○	
	自身が成長したいという思い	○	○	○	○	
エンジョイメント		○			○	○
ストレッチ	個人間での取り組みから広げる	○	○		○	○
	学校のシステムを利用する	○	○	○	○	○
	依頼されたことをチャンスとして捉え、実施する	○	○	○	○	○
	ほかの研修・学習機会とセットで取り組む	○	○	○	○	○
	場を設け、自身にもメリットが有るように活用する	○	○	○	○	
技術	レベルの高いことはしない	○	○	○	○	○
	役割を分散する	○	○	○		○
	学校全体で取り組む	○	○	○		○
	準備を入念に行う		○	○	○	○
	イメージや興味・関心を喚起する	○	○	○	○	○
	対話を支援する		○	○	○	○

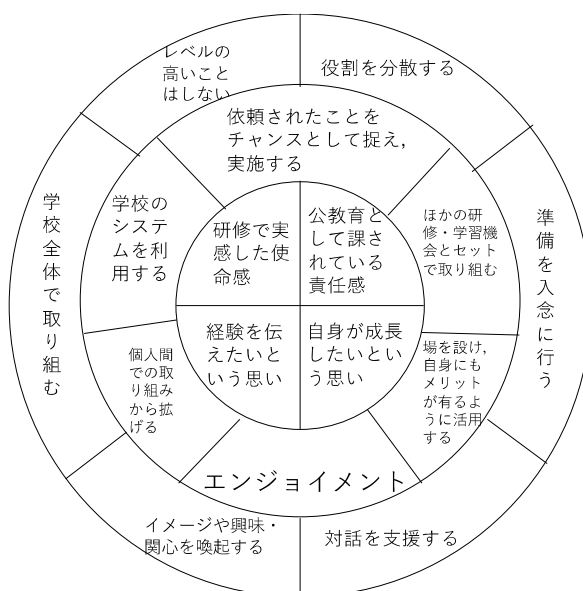


図 3 ICT 推進リーダーの研修転移場面での行動に関するモデル

(c) アクションプランシートの開発

初年度から暫定版を作りながら、研修終了後にまとめるアクションプランシートの改善を続けた。具体的には、以下の項目から成る。

1. < 講義開始前に > 講義で解決したい問題を整理しよう

2．＜振り返りパート＞ 講義での学びを振り返ってみよう

3．＜発展パート＞ 今後、どのように自分に活かすのかを考えよう

4．＜普及パート＞ 学んだことを還元しよう

このアクションプランシートについては、根本は当初のアイデアから変わってはいないが、上記1が加わることで、研修全体に位置づけられること、さらに振り返りをしやすくなると考えられる。

これまで、このシートの暫定版に書き込まれたものをデータとして利用し分析すると同時に、シート自体の改善へとつなげてきた。現在ではこのシートを新たな場に導入し、さらなる研修デザインの改善を計る一助としている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 寺嶋浩介・泰山裕・藤井俊史・民谷洋二・後藤聡志	4. 巻 68
2. 論文標題 アクティブ・ラーニングをテーマとした集合研修カリキュラムの開発と評価 中学校教員を対象として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要 総合教育科学	6. 最初と最後の頁 275-286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kosuke Terashima	4. 巻 2019
2. 論文標題 Professional Development for Middle Leader Teachers: ICT Integration in Schools in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of Society for Information Technology & Teacher Education International Conference	6. 最初と最後の頁 2269-2274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Terashima, K. , & Itagaki, S.	4. 巻 2020
2. 論文標題 Transfer of Training in Middle Leader Teachers' Professional Development for ICT Integration in Schools.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 EDULEARN20 Proceedings	6. 最初と最後の頁 6422-6426
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21125/edulearn.2020.1687	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 泰山裕・寺嶋浩介・時任隼平・藤井佑介	4. 巻 JSET20-3
2. 論文標題 教員の集合研修の転移モデルの検証	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究会報告集	6. 最初と最後の頁 125-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 時任隼平・藤井佑介・寺嶋浩介・泰山裕	4. 巻 JSET20-4
2. 論文標題 英語科教員研修で得た成果の転移に関する調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究会報告集	6. 最初と最後の頁 171-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 斉田俊平・寺嶋浩介	4. 巻 2
2. 論文標題 ICT活用指導力の向上を図るためのシステマ的アプローチによる教員研修設計と効果検証	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教師のセルフスタディ(日本教育メディア学会企画委員会編)	6. 最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 寺嶋浩介・泰山裕・時任隼平・藤井佑介
2. 発表標題 教員の集合研修の転移に関する調査
3. 学会等名 日本教育工学会 2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 時任隼平・藤井佑介・寺嶋浩介・泰山裕
2. 発表標題 教師は集合研修で得た知見を校内においてどのように活かすのか
3. 学会等名 日本教育工学会 2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 寺嶋浩介・泰山裕
2. 発表標題 教育実践事例の開発と交流による集合研修のカリキュラム開発-中学校教員向けアクティブ・ラーニング研修を対象として
3. 学会等名 日本教育工学会 第34回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 寺嶋浩介・泰山裕・時任隼平・藤井佑介
2. 発表標題 ICT推進リーダーの普及に資する行動の分析 研修転移場面に着目して
3. 学会等名 日本教育工学会 2020年秋季全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 時任隼平・藤井佑介・寺嶋浩介・泰山裕
2. 発表標題 スクールミドル育成を目的とした教員研修と教員文化に関する考察
3. 学会等名 日本教育工学会 2020年秋季全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 斉田俊平・寺嶋浩介
2. 発表標題 ICT 活用指導力の向上を図るためのシステムのアプローチによる教員研修設計と効果検証
3. 学会等名 第27回日本教育メディア学会年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 寺嶋浩介・泰山裕・時任隼平・藤井佑介
2. 発表標題 教員を対象とした集合研修の研修転移を検討する
3. 学会等名 日本教育工学会2021年春季全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 寺嶋浩介・泰山裕
2. 発表標題 教育実践事例の開発と交流による集合研修のカリキュラム開発-中学校教員向けアクティブ・ラーニング研修を対象として
3. 学会等名 日本教育工学会 第34回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 久保田賢一・今野貴之・寺嶋浩介 他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 228
3. 書名 主体的・対話的で深い学びの環境とICT	

1. 著者名 稲垣忠・寺嶋浩介 他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 教育の方法と技術 主体的・対話的で深い学びをつくるインストラクショナルデザイン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤井 佑介 (Fuji Yusuke) (20710833)	長崎大学・教育学部・准教授 (17301)	
研究分担者	時任 隼平 (Tokito Jumpei) (20713134)	関西学院大学・高等教育推進センター・准教授 (34504)	
研究分担者	泰山 裕 (Tanzan Yu) (90748899)	鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授 (16102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関